二　首都バタビアにおける学生生活

大都市バタビアへ

父の望みは私が医者になることだった。父はいつも私に向って「医者になれば金は向こうからやってくる。こっちから求める必要はない。それに医者は人びとに尊敬される」というのが常だった。

私はムロ（普通中等学校）を卒業した後ジャワに渡り、首都バタビアの普通高等学校のBコースに入学を許された。Aコースは文科系で、Bコースは理科系だった。学科は数学、物理、化学、動物学、植物学、図画、英語、仏語、独語などであった。マレー語も宗教教育も正規にはなかったが、カスマ先生とルム先生は宗教教育の重要性を強調して、1週間に1度、講堂で課外の宗教講話があった。

私は3年間、無欠席で通した。席は小学校以来いつも最前列だった。私はムロのときも、高校に入ってからも、きちんと時間割を作ってそれによって行動した。朝の7時半から午後1時まで学校ですごし、昼食後の1時間か1時間半は休息、それから2時間勉強し、終了と休息、夕食後また7時半から10時まで勉強、というこの時間割は平日のもので、日曜祝日には、宗教講話やガンクナリでの政治集会、またはクウィタンのPPPI（学生会）社交クラブにおける上級生の討論会などのために時間をさいた。このクラブのメンバーは医科と法科の生徒たちに限られていた。クラブには玉つき、トランプ、チェス、チェッカーなどの遊戯道具があり、コーヒー、紅茶、ミルクその他の清涼飲料水を並べたカウンターもあった。アルコール飲料は一切なかった。夕方でも音楽を奏したりダンスをしたりということは一切なく、クブン・ビナタンの学生会館とはまったくちがっていた。そちらのクラブのメンバーはほとんどが中国人、ヨーロッパ系混血児、オランダ人だった。PPPIのメンバーの多くが独立後にインドネシア共和国の大臣になった。たとえば法律家だったシャフリル氏は首相、同じく法律家のモハマッド・ルム氏は国連の首席代表、ナッシル内閣の外相、ウィロポ内閣の内相などをつとめた。ナッシル首相もここの出身だったし、法律家のトゥンク・ムハマッド・ハッサンは北スマトラ知事、宗教相をつとめ、やはり法律家のハザイリン博士は、1953年にアリ・サストロアミジョヨ内閣に内相として入閣した。同じく法律家のスタン・モハマッド・ラシッド氏もスマトラ西海岸州の知事、駐イタリー大使などもつとめた。アダビア学校で私の先生だったアブドゥラ氏の兄弟だった法律家故アサート氏は、1946年から48年にかけてのインドネシア共和国のジョクジャカルタに設けられた臨時政府で副首相の要職にあった。A. K. ガニ博士も貿易商、南スマトラ知事などをつとめた。私は当時まだ高校生で、このクラブの正規のメンバーではなかった。

政治への目覚め

それまでの私はオランダ人、中国人、日本人たちと社交的なつき合いをしていた。スマトラ時代のそうした交際は急激に薄れ、バタビアに来てからの私は友人を選ぶようになった。もうつき合いのためのテニスはしなくなった。この当時親しくしていたのは法律学科のヤミン、医科大学生のA. K. ガニをはじめ、パダンの中学校における級友やそれに2級上のタンジル、アバス、ハザイリンその他であった。

私はイスラーム青年同盟の一員だった。私は学校で受けた宗教教育の継続として、1週間に1度、クウィタンの小さな会館で行われた講義にずっと出席していた。そこで私は学校での教育で決して得られないような勇気、イスラームの犠牲的精神などを学び、イスラームの教えを通して愛国心とナショナリズムの気風を吹きこまれた。それは私の意識にぴったりくるもので、“沈黙の反逆者”としての私の政治的思想や見解は、これらによって豊かに培われた。

私は熱心にガン・クナリで催された政治集会にも参加した。それはPNI（インドネシア国民党）、SI（イスラム同盟）、PPP（学生連合）、ムハマディア（近代イスラーム改革運動の組織）などにより主催されたものであった。私は特に後の大統領スカルノの演説をきいて感動した。彼は繰り返し繰り返し、こう叫んだ。

「過去300年にわたってわが人民はオランダ人のために情容赦もなく制圧されてきた。いまこそわれわれは、わが国からオランダ勢力を駆逐すべきときである。団結せよ。もしわが右手に10名の青年があれば、左手を用いずとも全世界を震感せしめうる。オランダ帝国主義は個人主義的であり、物質主義的であって、わが国の豊かな資源を枯渇せしめた。それはまるで蛇のように、頭はオランダに置きながら、その尾はわが国にあり、身体中、金貨でおおわれている。その尾がゆれ動くたびにオランダに金貨が落ちるのだ。わが国民の1日あたり平均生活費は2セント半である。安い労賃はオランダの腹を肥やす。われわれの血は吸いとられ、汗もしぼりつくされる。さあ、アチェ〔スマトラの北端〕からメラウケ〔蘭領ニューギニアの東端〕まで、先に手を結ぼうではないか。団結は力を生むが、ばらばらでは倒れる。アジアはいま独立を目ざして西洋の帝国主義と戦っている。イギリス帝国主義のくびきの下にあえぐインドも独立のために戦っている。仏領インドシナもフランス帝国主義打倒のために戦いつつある。フィリピン人の愛国心も独立を目ざして、アメリカに戦いをいどんでいる。東方で唯一の独立国は日本のみである。日本は小さい国であるが、巨大なロシアを打ち破った。それは西洋に対する東洋の勝利であった。東洋は西洋に劣っているのではない。日本の勝利は、植民地主義に抑えつけられていた諸民族の目覚めのしるしであった。インドネシアも、迅速な発展をとげた唯一の独立国日本と同じような発展をとげることができるのだ。われわれは、西洋と比肩しうる発展をなしとげた日本を、誇りに思うものである。日本はわれわれの兄である。われわれはオランダのために、その機会を奪われているのだ。」

スカルノ大統領はしばしばコーランの語句を引用しながら語った。「その国自体が変化を

めざして努力しないかぎり、その国の運命は変わらない」「われわれの手足は縛られ、舌は切られている。われわれはあたかも、金の篭に入れられて餌を与えられている小鳥のようである。われわれの国民的統一は強い鎖のようなものであるが、その鎖のたった一つでもだめになれば、鎖全体がだめになってしまう。東は東、西は西、両者は相会うことはない！　われわれは人民とともに泳ぎ、人民とともに溺れる。それが親愛なる使命である。鶏は暁がきたから鳴くのであって、鶏が鳴くから暁がくるのではない！　いまこそ独立を（ムルデカ、スカラン、ジュガ）！」

スカルノ大統領は、演説の度ごとに、最後に必ずこぶしを握りしめて高く掲げ、「ムルデカ、ムルデカ、ムルデカ！」と3度、祈るように叫ぶのが常であった。そしてそれに合わせ聴衆も総立ちになり、こぶしをあげて「ムルデカ、ムルデカ、ムルデカ！」と大声で唱和するのだった。この握りしめたこぶしは、インドネシアの民が、指導者の後にしっかりと団結して、独立のために戦っている姿を世界にしめすシンボルであった［後藤乾一・山崎功『スカルノ―インドネシア「建国の父」と日本』吉川弘文館、2001年参照］。

故スカルノ大統領はバンドンの工科大学を卒業した。イスラームの組織、サレカット・イスラームの有力な指導者であったハジ・アグス・サリムとハジ・チョクロアミノトはまた、日本がロシアに勝利を収めたことを、「圧迫された諸国民の眼を開いたもの」と言った。「この世界の中であらゆる国民は、アッラーの恵みのもとで生きる権利を平等に与えられる。われわれは何人をも怖れない。ただアッラーの神をのみ畏れる。日本はわれわれに良い例を示してくれた」と彼らは演説の中でいつも強調するのだった。

また、ムハアディアは、90パーセントが文盲というインドネシア人の教育制度を高めるために、オランダ植民地政府に対して義務教育を推進するよう強力に働きかけた。「国家の建設には教育が不可欠である。われわれ国民の実に90パーセントが文盲である。子供たちはちゃんとした教育に飢えている。日本は、すべての子供が6歳になると学校に行っている。日本の力はその教育にある。」

この教育の重要性については、すべての指導者が強調したが、特にタマン・シスワという教育運動の指導者であったキ・ハジャル・デワントロが、常に声を大きくしてそれを説いていた。

こうした演説はきわめて熱烈なものであったが、一般大衆はまだ、それほど心を動かされることがなかったようである。デモもなければボイコットの動きもなく、サボタージュも政治的な騒動もなかった。それどころか私は、ときどき人が「われわれに自治が可能だろうか。われわれはまだブルム・マタンだ。〔まだ成熟していない〕」という言葉を耳にしたのである。「ボド〔おろか〕なんだ。自分たちでやれば、何もかもめちゃくちゃになってしまう。オランダの支配のままでも、結構幸せで繁栄しているではないか」などという言葉も聞いた。こういうことをいうのは、主として蘭印政府の役人たち（これは理解しうることだ）、混血児、中国人、キリスト教徒それにオランダ一辺倒のインドネシア人たちだった。

独立後10年ないし15年たった頃でも、政治に不満があると、次のような声がきかれた。「オランダ人を呼び戻そう。オランダ人にもう一度統治してもらおう。オランダに国を任せよう。われわれはオランダの下で幸せで繁栄していた。」「おろかな時代」「かまやしない」「骨がはずれないかぎりは、按摩にもましておきやいい」などともいわれた。

スマトラ青年代表となる

＊以下の記述は、インドネシア民族主義運動史上有名な「青年の誓い」について述べたものであるが、ガウス氏は明らかに記憶ちがいをされている。ガウス氏亡き今、事実の前後関係を確認するすべがないため、原文にしたがうものとする。正確には「青年の誓い」は、1928年10月、ジャカルタで開催された第2回インドネシア青年会議において採択されたものである（編訳者注）。

1930年の末、PPPSはジョグジャカルタに青年会議を開催する決定を下した。この会議にはジャワ、スマトラ、メナド、およびアンボンの各地からも、青年たちが代表として派遣されるはずであった。しかし問題は、スマトラから誰が出るかということであった。スマトラから誰も出なければ、インドネシア青年の団結を謳うわけにはいかない。スマトラは非常に大きく重要な島で、ここから代表がこなければインドネシアの統一もありえなかった。

あるうららかな日曜日の朝11時ころだった。学生会館のクラブにいた私は、急にA. K. ガニとタムシルから庭に来るようにと呼ばれた。私はちょっとびっくりした。2人とも、ミナンカバウの同じ地方から来ている大の親友であった。庭へ出るとガニは私に、ジョグジャカルタで開かれる第一回青年会議に出席する気はないかとたずねた。私はただ黙って彼の顔を見つめた。するとタムシルも口を出して、ぜひ出るようにと勧めた。しかし、「僕なんかがどうしてスマトラ青年の代表になれるだろう」と思った私は、まだ黙っていた。2人の顔色が変わった。失望の表情だった。それでも私は黙っていた。2人はこもごも、「スマトラからどうしても誰か出なくてはならない。それなのに出る者がいないんだ」といった。そこへアバスもやってきて、ぜひ出ろと私に勧めた。私はそれまで、何かの会の代表になったことなど一度もなかった。急に言われても途方にくれるばっかりだった。それにあまり知らない土地で、大きな会議でスピーチをしなければならないのだ。4人とも黙ったままだった。しかし、3人から口をきわめて勧められた私は、ようやく、渋々ながら、行くという返事をした。一つも嬉しくなかったのだ。だが3人はこもごも私に礼をいい、心からほっとしたという様子だった。ジョグジャカルタへの出発と到着の日時、ジョグジャカルタでの宿泊所、会議のプログラムなどが告げられた。

私たちがバタビアのガンビル駅を出発したのは、10月24日の午前8時30分だった。そしてバンドンで一泊したのち、私たちは26日の午後6時30分にジョグジャカルタに到着した。バタビアから東南へ約500キロ、中部ジャワのスルタン領の古都である。10月27日の夕、開会式のスピーチは、王家の一員で法科大学のフセイン・ジャヤディニングラット教授によってなされた。教授は、インドネシア青年の団結を訴え、将来のインドネシア国家の地位

と命運は青年の手にあると強調した。次にはモハマッド・ヤミン氏が立ち、スマトラ人の立場から、スマトラ青年団の団結ぶりを説明した。ジャワの法律家ハディ氏も、青年の一致団結の重要性を説き、いまやインドネシア全体の青年が統一されるべき時がきたと語った。これらのスピーチの後はガムラン音楽と舞踊の余興があって、開会式は10時半に終わった。その晩、私はほとんど眠れなかった。青年の団結についてなど、何をしゃべったらいいのだろう。私はまだ2年生で、20歳になったばかりだったし、そういうことについて、まとまって考えたことなどなかった。どうしたらいいだろう。誘われても来なければよかった、と私は一晩中まんじりともできなかったが、やがて、まあなるようになるだろうとあきらめた。

翌28日に私たちはまた昨日の講堂に集まった。私はもう仕方がないと覚悟をきめて、落着いた気持だった。私は自分がスマトラから来た青年であるということを聴衆に印象づけようと、黒光のするパダン帽をかぶっていた。実際に私は、クウィタンの学生会館の庭から拾われるように連れてこられたのだった。私は元気を出して、アンボン、メナド、ジャワとつづく青年代表たちのスピーチに耳を傾けた。次は私の番だった。私はまったくどきどきしないでいられた。私は、パダンやガン・クナリできいたいろいろな演説を思いだしながら、話しはじめた。言葉はすらすらと出てきた。私は青年の連帯の要点についてふれ、祖国への愛、一つの旗の下に集まるべき青年の義務について語った。私がもっとも力をこめて語ったときには、聴衆は拍手し、嬉しそうにどっと笑った。私は次のように言ったのである。

「兄弟姉妹の皆さん、私はスマトラからきました。スマトラの青年たちは、インドネシア中の兄弟たちが一致団結することを、心から支持します。私がお伝えできる非常によい便りは、私がジャワへ来る途中で、スンダ海峡（ジャワとスマトラを分ける海峡）はもう見えなかったということであります。ジャワとスマトラはもう一つに結ばれました。この二つの島は結合されたのです。これが、私がスマトラから持ってきたよいお知らせです。」

こういうとき、会場を埋めた300人ほどの聴衆はいっせいに手を叩き、ほめそやし、笑いをもって応えてくれた。私は何も意識せずに聴衆を見わたした。私は知らなかったのだが、私のその言葉は皆の胸を打ち、印象的で歴史的な意義をもつものとなったのだった。私は実際、国家統一の歩みの中で、その象徴的な表現がそれほどの重みを持つとは信じていなかった。聴衆は、私のパダン帽のおかげで、私がスマトラから来たことを信じていた。この日の、10時30分、次のような決議とともに、インドネシア全国にわたって「インドネシア・ムダ」が結成されたのである。

サトゥ・ネガラ、ネガラ・インドネシア（国家は一つ、インドネシア国家）

サトゥ・バンサ、バンサ・インドネシア（民族は一つ、インドネシア民族）

サトゥ・バハサ、バハサ・インドネシア（言語は一つ、インドネシア語）

こうして私の神聖なる使命は果たされた。私は義務を完了したのだ。私はこの1930年のジャカルタにおける1日を、私の第2の栄光の時とよびたい。私は20歳であった。

翌29日、私たちはスルタンの王宮を見物に訪れ、そこで昔の文化遺産をみた。制服、家

具、ガメラン楽器の一揃い、乗り物、槍、短剣などさまざまあった。それからプランバナン寺院とボロブドゥール寺院を見物した。夕方にはお別れのパーティーがあった。私たちは翌日の10月30日、朝の汽車に乗ってバタビアへ向かい、11月2日に疲れきって帰り着いた。

私は父に黙ってこの青年会議に出かけた。手紙を書いてとめられるのがこわかったからだった。父は、私が学生の分際で政治に関与することを、決して許すまいと思った。それは父がいつも「勉強第一、政治は二の次」と私にいいきかせていたからである。私の今後の勉学はどうなるだろう。私は退学になるおそれもあったし、少なくともオランダ人の教師たちのブラックリストにはのると思った。そうすれば学業の妨げになる。3ヵ月のあいだ、私は旅行のことはひたかくしにして、ひたすら教師たちに知れぬようにと祈っていた。幸いなことに私は校長からも、教育省からも、まだ情報部からも何も言われなかった。しかし、私は、私の足跡が“かぎつけられている”ことは確かだと思った。私の行動が注目されていたことはたしかだった。しかし、“沈黙の反逆者”にはまだあと1年半の勉強が残っていた。私はミナンカバウの古い諺「決して後戻りしない歩み」を心にとどめて自重を重ねた。

ナショナリズムが高揚し、反帝国主義、反植民地主義、オランダ帝国打倒、オランダの分割支配政策ならびにその圧政反対の気運がみなぎり、独立獲得の熱意はインドネシアの一般民衆の熱烈な支持を得るようになってきた。集会、演説、印刷物、ないしは書物による運動に対するオランダの禁令は、インドネシア人たちの強い抗議をうけた。当面の反対運動の目標は、オランダ人総督がもっている、政治犯と目される者を裁判もなしに処罰できる特別な権限の撤廃であった。私はこういう事件の成行きを注意して見守っていた。母国をどうにかしてオランダの支配から解放させなければならい、ということはますます明瞭になってきた。

1930年に全世界を襲った経済危機は、インドネシアにおけるオランダ経済にも大きな打撃を与えた。それより数年も前から、インドネシアには日本商品が大量に流れこんでいた。そして人びとも、オランダ製品より、日本製品の布地、陶器、衣服類などを好んで買いもとめた。インドネシアの貧しい民衆にとって、安価な日本製品は、ふところ具合にちょうど合っていたのだ。そして日本製品はずっと奥地の方まで入りこむようになった。「日本のものは安いよ。日本製品を買おう」ということが口から口へ伝わっていった。オランダ製品は高価で一般の手にとどかなかったので、人びとは安い日本製品を、ほっとした思いで受け入れた。それにお客に対する接客態度もちがっていた。オランダ人は横柄であったのに対し、日本人の店はていねいで愛想よく、買う人の心を打った。これは日本の“心理的勝利”であったと思う。私がよく覚えているのは、スポーツ用品を買っていたトコ・ゴトウという店で、パサル・セネンにあった。私はここでよくラケットを買ったり、それを直してもらったりした。バタビアには、日本人の店がかなりたくさんあった。

日蘭経済関係の摩擦

世界大恐慌後オランダ市場は急速に縮小していった。インドネシア在住のオランダ商人た

ちはそれにいらだち、それを日本のダンピングのせいにした。日本からの輸入品に対して、次々に禁制が発せられ、ついに1934年バタビアで日蘭会商が開かれることになった。日本側の首席代表は長岡〔春一〕氏であった。その時の日本側のスローガンは「生き、しかして生かしめよ」というものであったと記憶する。その会議は結局失敗に終わった。新聞の伝えるところによれば、両者の主張の懸隔がありすぎたからである。長岡代表は激怒のあまり会議のテーブルを叩いた、という噂だった。オランダ側は日本の経済発展を快く思っていなかったのである。

私が記憶している限りでは、インドネシアの政界、宗教界の指導者たちは、「生き、しかして生かしめよ」という日本の主張に共感を抱いていた。そこにはナショナリストのひそかな喜びがこもっていた。日本はオランダに一矢むくいたのである。日本がダンピングをしているか否かは、問題の中心ではなかった。緊急の課題は、生死の淵に瀕している貧しい民衆の生活を、どのようにしたら支えられるかということであった。

“インドネシア工業”などというものは皆無だった。土着の小さな家内産業も未熟で、近代技術による工業化を必要としていた。インドネシア中にあふれた安価な日本製品は、大量生産を行いうる日本の潜在能力の大きさを示すものであった。オランダ人はいつも、インドネシア人の存在を犠牲にして、いかにしてできるだけ大きな利益を、できるだけ早くあげるか、ということばかりを考えていた。

1933年の春、独立後初代の副大統領故モハマッド・ハッタ博士は、博士の叔父アユブ・ライス氏に同道して日本を訪れたが、その目的は、インドネシアの農民のために、家内工業や小規模産業をどのように合理化したらよいか、また、日本は実際にダンピングを行ってインドネシアからオランダ製品を駆逐し、そのあとでインドネシアを経済的に支配しようとしているのかどうかを探ることであった。私はそのときたまたま日本に留学中であり、日本への観光旅行のお伴をして、道すがらそれについて話し合ったのだった。このときは、私がハッタ博士と会った2度目であった。最初の時は、あのガン・クナリの大会のときであった。モハマッド・ハッタ博士はロッテルダム商科大学で経済学を修めていた。

インドネシアにおける独立運動に強力なモラル・サポートを支えたものに、1905年の日本の対ロシア勝利、英国統治に反対するインド国民会議派の独立運動とならんで、ジョヨボヨの予言というものがあった。それは、「近い将来、この国は“ウォン・クニンガン”（黄色人種）によって“スタフン・ジャグン”（とうもろこしが育つ1年間）の短期間支配されるであろう。しかしその後にこの国は自由となり、国民自身によって統治される。国は富み栄え、国民はたいへん幸福になる」というものであった。

この予言は、ジャワの指導者たちの間でのみならず、一般のジャワ人たちにも強く信じられていた。そのことに私が気づいたのは、1930年にバタビアで、民族主義運動の最高揚期をみずから体験したときであった。

しかしスマトラでは、この予言はあまり信じられていなかった。だが、事実、歴史はこの

予言の真実であることを説明した。1年間ではなかったが3年半の“スタフン・ジャグン”、すなわち日本という“ウォン・クニンガン”（黄色人種）の支配の後に独立が獲得されたのである。いずれにせよ、この予言を信じるか否かは、個人的な問題である。

私がまだ母の胎内にいたころから、父はもう、私を将来オランダに留学させることを夢みていた。故郷のパリアマンからパダンに移った私は、オランダ人の家庭に下宿させられた。そして12年間のパダンにおける教育はすべてオランダを指向していた。そして私は、スマトラ青年同盟の一員でもあった。

そういう私の方向に転回点が生じたのは、文化的あるいは政治的な集会に参加して情熱を燃やしたり、オランダ人のテニス選手に2度もの敗北を喫した後に見事に勝利をおさめたり、オランダ少年にいじめられ、その仕返しに拳骨をふるまって“沈黙の反逆者”になったりしたことをはじめ、近藤夫妻による日本留学の勧め、日本のおもちゃで楽しく遊んだこと、最初の日本人の友達だったボイちゃん、第二の友となった日本製の子供用自転車、行商人からもらった日本の丸の旗、その他さまざまな経験であった。

バタビアでも、オランダに傾いた教育を3年間にもわたって受けたが、私はここでもイスラーム青年同盟に入って活躍した。宗教的、政治的会合にも、いままでよりもっと真剣な気持ちで参加した。ガン・クナリの一般集会、インドネシア学生ユニオン・クラブ、日露戦争、ジョグジャカルタでインドネシア青年会議の代表となったこと、インドネシアとオランダの政治的対決、オランダと日本の経済的対立、スカルノ、ハッタなど私が師と仰いだ人びと、インドネシア・ムダを通しての交わりなどが私の民族主義を開眼させた。

私はこうして沈黙のうちに民族主義者に育ちつつあった。インドネシアの学生たちのオランダに留学する傾向は、依然として非常に強かった。インドの学生が英国に留学し、仏領インドシナの学生がフランスに行き、フィリピンの学生がアメリカへ留学するというのは自然な伝統で、それを考えると、私もオランダへ行かなければならなかった。私は日本留学について心の中で自問自答していた。「身体がこんなに小さいのに、きびしい冬の寒さに耐えられるだろうか。病気になりはしないか。私には、日本人の生活習慣になじむ適応性があるだろうか。食物はどうだろう。学位をとっても、それはオランダ側に認められるだろうか。私の志望がオランダ官憲によって、妨害されることはないだろうか。」私は誰かに意見を求めるということはしなかった。私は父にも相談しなかった。私が父に手紙で私の決意を知らせたのは、パダンに向けて出発する2ヵ月前ほど前のことだった。このときには、良かれ悪しかれ、私の決心は定っていた。「日本へ！」それがわが進むべき道であった。

私が自分の決心を打ち明けた唯一の友人は、私が泊まっていたホテル・スラバヤのルームメイト、ダニエル君だけであった。オランダ政庁がどんなことで私を困らせようとするか分からない、それで私は日本留学の計画を極秘にしていた。

ところがある朝、ホテル・スラバヤのあずまやにひとり腰かけていると、二人の若い男が近づいてきて、自分たちは日刊の『ビンタン・ティムール』（東方の星）記者だと名乗り、私

の日本行きのことを尋ねた。私は、どうして自分の計画が漏れたのかと大いに驚いたが、仕方なく答えた。

「私は新聞などで、日本が工業国として成功したことをいろいろ読みましたし、政治家たちも皆そう言っています。私は医学を勉強しに行きますが、これはまったく一人で、誰にも相談しないで決めたことです。あと2、3週間でパダンに向けて帰郷します。それからシンガポール経由で日本に行きますが、日本にどのくらい滞在するかまだ分かりません。」

「あなたの決断は実に勇気のある決断です。おめでとう。心からあなたの成功を祈ります」と一人がいった。私はただ、有難うと答えた。

私はこのインタビューが嬉しくなかった。新聞に出ると、一般の人びとにも、オランダ政庁にも知られてしまう。もう秘密にしておくことはできない。実際、次の朝、その新聞は私についての記事を、ほめ言葉を連ねて掲載したのであった。「ガウス君の決断は、まことに慶賀すべきものである。インドネシアの学生が留学先を変更すべき時が来たのだ。いつまでもオランダへ行き、そして政庁の役人になるばかりが能ではあるまい。日本は先進国である。技術、技能、機械工学、経済学、商業および農業分野においても、日本から学びうることは多いのだ。これらはわが国がまさに必要としている実際的な知識である。ガウス君のえらんだ道は、オランダの植民地政策の歴史の中でとられた最初の一歩である。われわれは心から彼の成功を祈るものである。」

この新聞の主筆はパラダ・ハラハップ氏〔親日派ジャーナリストとして知られた〕であった。そして私は、東京に滞在中の1933年の末、日比谷公会堂で催された大亜細亜大会で氏と再会することになる。

この新聞記事があらわれてから数日後、オランダ語の日刊新聞『ジャワ・ボーデ』に、次のような、警告として受けとられる記事が出た。

「われわれは、当地の学生が日本へ勉学に行こうとすることを止めるわけにはいかない。彼らは自分の意志により、自分で渡航するのだからである。しかし気候、風俗、習慣、異なった環境、言語などの点からみて、不利な点は多々ある。彼らにとっては時間と金の浪費であろう。このように、これまでの伝統に対する不満が現れたのは、政府の教育制度にどこか欠陥があるからにちがいない。日本へ留学する学生たちが日本精神に染まり、日本の思想や企図をこの国に持ち帰ることに対しては、真剣な考慮が払われねばならない。政治運動は彼らによって影響をうけることとなろう。そして日本はそれを、なんらかの目的か企図のために利用することになろう。これについては政府の慎重なる考慮が望まれる…。」

政庁からの発言はなかった。私のとった措置と進路は“疑惑”の目で見られることとなった。もちろん、“沈黙の反逆者”に対して政庁がおめでとうをいったり、成功を祈ったりすることはあり得ない。しかし2つの新聞記事は、政治家や、民族主義者や、学生や、一般大衆のあいだにさまざまな論議を引き起こした。

私は父がいつもいう言葉を思い出していた。「もしお前の道が真直ぐなら、お前は目的を

達することができるだろう。もし頭の上にのしかかるものがあったら、それを打ち砕き、決して後戻りせず真直ぐに進むことだ。」マレーの諺にも「魚の卵は決して蛙になることはない」というのがある。

さらばバタビア、日本への出発準備

父は私を祝福してくれた。私は日本で勉強できることになった。一般の人びとも新聞も、私がひそかに出発したことをまったく知らなかった。私の身につけたものは、いくらかの日本語の知識、それはポトジョの日本人クラブの藤原氏から4ヵ月間、週に3回、1時間ずつ習っていたものであった。“ツ”の発音はむずかしかった。藤原氏は、その発音は舌の先を上の歯の裏側に押しつけると同時に、息をのどや肺からではなく腹から軽く口をあけて出すのだと教えてくれ、それを家で練習するようにと言った。私はそれを何週間も練習し、やっと及第して先生にほめられた。“ル”の発音もRの音とはまったくちがっていた。文章の構成も欧米の言語とはまったく異なり、「私は本を買う」という時は、英語のように、“買う”が先で本という目的語があとにくるのではなかった。いつどういうときに、は、が、を、に、の、で、などを使うかは、練習をつんで覚えるよりほかなかった。私は3ヵ月間でどうやら日常会話では用が足せるようになり、とても嬉しかった。藤原夫人は稽古のあとには、いつも日本茶とビスケットなどを出してくれた。私はパダンの近藤夫人の親切なもてなしを思いおこした。藤原氏は私に日本語を教えるのに報酬をとらなかった。彼はパイロット万年筆製造会社の社員で、私は日本へ来てから、新宿から高田馬場までの途中の左側のビルに、その大きな看板が出ているのに気がついた。この工場に藤原氏はいたのだろうか。

日本語のほかにもう一つ身につけたものは、日本領事館の佐立参事官の親切な処遇であった。係官は私の査証申請ににこにことすぐ応じてくれ、「おめでとう」と「成功してくれ」という言葉と共に暖かく握手をしてくれた。佐立氏は初めから非常に親しみをもって接してくれ、東京駅についてから何か面倒があるといけないからと言って、丸の内の煉瓦造りの建物の一つにある南洋協会の谷口氏宛ての紹介状まで書いてくれた。そしてまた、自分の家族の住所まで教えてくれ、私に訪ねるようにと言った。私は東京に着いてから彼の家を訪ねた。佐立氏の親切は私に深い印象をあたえた。どこの領事館へ行っても、初めて会っただけでこんなに親切にしてくれる参事官はいないだろう。佐立氏はオランダ語ができたので、私たちはオランダ語で話したのだった。

故郷での渡日前の挨拶のため、パダンには1932年11月の初めに着いた。ひっそりとした到着で新聞記者は一人も現れなかった。

私の父も義母も私を大喜びで迎え、とても得意げだった。当時、息子を日本へ留学させるなどと考える者はいなかったからである。西洋の方が東洋より秀れているというのが通念で、留学先はオランダと決まっており、日本など思いもよらなかった。父と義母が誇りとしたことは、彼らの息子が歴史はじまって以来初めて、日本留学への道を進んだからであった。

しかし叔父たちが皆そうであったわけではない。一人の叔父は、「そんな留学させる金があったら貿易に使った方がよい。そうすればもうかる。金もうけはすぐ出来る。勉強など必要ない。そんなに上の学校へ行って何になる。中学校へ行けばそれで十分じゃないか」と言った。それはアパク・ヌルディン叔父で、彼は本当に憤慨していた。私は何も答えずに頭を下げただけだった。叔父はそういいながらも、小遣い銭として7ギルダー50セントを私にくれた。それは12軒の貸家からの家賃だった。

それから私は生地パリアマンに行った。母とその再婚相手のスタン・カマルディン氏に、別れを告げるためだった。義父が最初にたずねたことは、そんなに勉強して得になるかということだった。「いったい何を勉強するのだ。」私は日本で医学を勉強するつもりだと答えた。「どうしてだ。医者になるつもりか。」そして彼は言葉をついで、「医者は米を食べる。浜で網を引く漁師も米を食べる（パリアマンでは漁師はいやしい職業と見られていた）。ちがいはないじゃないか」といい、この言葉を3度もくりかえした。

私はこの言葉を聞くと母の方を向き、母の右手をとって接吻した。私の頬には涙が流れ落ちた。母は私を慰めて、「お祈りのたびにいつもお前の成功を祈っているよ」と言ってくれた。「アッラーの神はきっとお前の勉強を祝福してくださる。一生懸命勉強しなさい。私が耐えられない思いでいるのは、お前の弟のムフタルが、遠いエジプトへ行ってしまっていることなんだよ。いつ帰ってくることか、それに今またお前も行ってしまう。2人とも私をおいていってしまうのに、私はもう年もとっているし…ガウスや、いつまたお前に会えるんだろう。もう二度と再び生きてお前たちに会えないかもしれない。」母はそう言いながら右の手で流れる涙をぬぐった。私もすすり泣きしながら、「お母さん、僕のためにお祈りしてください。もしぼくが勉強に成功したら、アマクのことはきっと面倒をみます。私は必ず帰ってきます、それはぼくの義務ですから」といった。母は私の頭をやさしくなぜながら、「一生懸命勉強をおし、そして身体に気をつけてね。アッラーの神よ、どうぞこの子の希望を叶えさせたまえ」と言った。

母との別れは本当につらく悲しいものだった。私ががっかりしたことは、もう近藤鶴吉夫妻はミナもボイちゃんもともに、どこかへ越してしまっていた。テニスコートも荒れ果てていた。

私が乗るはずの汽船ティドレ号は、1932年12月21日の午前10時にパカンバル港を出発して、シンガポールへ向かうということであった。私を見る父と私は、いとこのアジョ・ハムザの持っているシボレーを借りて、隣人のハジ・ヤフヤと一緒に出発し、12月12日にブキティンギに行き、そこに2晩泊まった。そこで私は、土地の商業団体であるプルサトアン・スダガル〔商業連盟〕の晩餐会に招待されるという光栄に浴した。この会で私は、何人ものえらい人たちに紹介されたが、その中にはパダンのプルサトアン・スダガルの創立者であるエンク・タヘル・マハ・スータン氏や、国民銀行の頭取エンク・アンワール・スータン・サイジ氏などもいた。私は勇気と強い意志を持つ青年としてほめそやされた。「この歴

史的な第一歩が必ず成功して、彼のあとに多くの学生たちがつづく良い先例となるように」と人びとはいった。私はどうしても成功して、成果を持ち帰り、人びとの役に立たねばならない、と改めて志を固めた。それはまさに私にとっての大きな第一歩であった。集まった人びとはみな私に心からのおめでとうを言い、幸運と成功を祈ってくれた。そして私は日本からときどきニュースを送るようにと依頼され、日刊紙の「ラジオ」を通じてそうすることを約束した。その会場で最も得意だった人物はエンク・タヘル・アラー・スータンだった。何故かというと、私は彼が創立者である学校、スコラ・アダビアの卒業生だったからである。私たちの握手には嬉しさとともに何かしらのさびしさも交じっていた。

私たちは12月20日の夕、パカンバルに向けて出発した。道路は狭く、ブキットバリサン山脈を越えて行く道の両側は右も左も深い谷であった。空には三日月がかかっていたが、曇ってしとしとと小雨が降っていた。私たちは車をゆっくりと慎重に走らせた。私は運転するいとこのアジョ・ハムザの隣の助手席に座った。後ろの座席には父とハジ・ジャヤが座っていた。午前3時半頃だっただろうか、まもなくバンキナンに着くというとき、私は突然、行手の路上15メートルほどの所に、火の玉のように光る虎の目を見つけた。私たちは車のスピードを落とし、じっと息をこらした。虎は車の方に向かって進んでくる、私たちは停車はしなかった。そんなことをしたら大変だ。虎は10メートルほどの所まで近づき、そこでじっと止ってしばらく私たちの方を、まるで「早く帰れ！」とでもいうように睨んでいたが、やがて身を翻して右側の藪の中に姿を消した。木の枝や草がザワザワいう音がはっきりと聞こえた。

私たちはほっと吐息をついた。バンキナンは野生の虎が出没することでよく知られた場所であった。もし虎にあったら「ダトック［長老］！」と呼びかけなければならないといい伝えられている。それは死者は虎に転生すると信じられていたからであった。私は迷信深くはないが、日本へ行く道中で、三日月の下で、虎に行手を遮られるとは何の前兆であろうか、とふと気にならずにはいられなかった。しかも霧雨の降る暗い晩のことである。危険があるのだろうか、それとも憂鬱で、さまざまな挑戦が待ち受けているのだろうか…

私たちはその後も注意深くゆっくりと車を進め、12月21日の午前7時半ころバンキナンに着いた。私たちは100メートルの幅がある川を越さねばならなかった。二人の男が長い竿で押す渡し舟が待っていた。川の流れは静かだった。向う岸に近づくにつれ、初老の日本人夫婦が住んでいる小さな木造の家が目についた。船をおりるときはその老人が世話をしてくれ、奥さんは多分台所で朝飯の支度でもしていたのだろう、姿を見せなかった。

オランダは第一次世界大戦以前に、ここへ橋をかける計画をたてたのだったが、1914年から1918年にわたる戦争中の財政難のために、途中で断念してしまっていた。ブキティンギからパカンバルまでの道路は、ミナンカバウとシンガポールとを結ぶ道であった。その日本人老夫婦はそこでの営業権を得ていたのであろう。商人も企業家も一般の旅行者もほっとした。「日本人の渡し舟がある」ということは口コミで人びとに伝わっていた。私はその日

本人の渡し舟で、1932年12月21日の午前7時30分、日本への旅路についたのだった。

9時ごろパカンバルについた私たちは、まっすぐに自転車屋のトコ・ニッポンへ行った。私の父は、そこの経営者である50がらみの日本人夫婦に、私を紹介して、いかにも得意気だった。私たちはにこにこと握手し、父は私が日本へ留学することを説明した。その夫婦は、私たちが自転車を買いに来たのだと思っていたらしい。「それはすばらしい」と主人は何度もいい、私に向かって「どこへ行くのですか」とたずねた。「東京へ、医学を勉強しに行くんです」と私は答えた。「いつ出発ですか。この町にお泊りなら日本人の宿がありますよ」と彼は教えてくれたが、父は、私が10時の汽船でシンガポールへ向けて出発すると告げた。「東京は大都会で、冬はとても寒くなります。風邪をひかないように、からだに気をつけていってらっしゃい。ご成功を祈っていますよ」と彼は別れの握手をしながら心をこめて祝ってくれた。トコ・ニッポンは波止場から半キロほどのところで、波止場にはもうティドレ号が停泊していた。

私は父の手に接吻しながらいった。「では行ってまいります。立派に目的を達成できるようにお祈りください。」「お前は賢くふるまって最善をつくしなさい。志をとげるまでは帰国のことなど考えないように。お父さんはお前の成功をいつも祈っているよ。」

そういう父の目は涙でいっぱいだった。ハジ・ヤフヤも私の手を握りながら励ましてくれた。「一生懸命勉強するんだよ。パリアマンの人びとは皆、お前が成功して帰るのを信じて待っているよ。みんなお前のことを誇りにしているのだ。だから空手で帰ってはいけないよ。お前が医学の勉強で立派な成績をあげるように祈っている。くれぐれも身体には気をつけて…。」

アジョ・ハムザは微笑しながらも淋しそうに「とうとう行ってしまうんだね。しっかり勉強したまえ。日本への航海がどうか愉しいものでありますように！。花を咲かせないで帰るような恥さらしなことはするなよ」といった。私はこれらの愛する人びととの別れと励ましの言葉を聞きながら、涙が頬をつたうままにしていた。

私がティドレ号に乗船したのは9時半頃、そして10時に船はゆっくりと桟橋を離れはじめた。私はかつて感じたことのないような悲しさと胸の痛みをおぼえながら、夢中で父とハジ・ヤフヤとアジョ・ハムザに向かって手を振りつづけた。マラッカ海峡までは48時間の航路であった。そして23日の早朝、私は無事にシンガポールに到着した。

税関ではちょっとしたごたごたがあった。太ったマレー人の大男の税関吏が、私の荷物を手荒くひっくり返して調べたのである。それはまるで私が金塊でも密輸していると疑っているかのようだった。私は言葉はていねいに、そんなに衣類を手荒に扱わないでほしいと言った。すると彼は憤然として、私が自分で荷物をすっかり出して見せるべきだといった。そこで私がそうすると、彼は怒った様子でそれを眺めていた。そのマレー人税関吏の名はイブラヒムと言ったが、これには後日談があって、私が帰国後、1938年にシンガポールのノース・ブリッジ街に診療所を開いたとき、彼は患者として私のもとを訪れたのである。私は彼の丸

い顔と太った身体を憶えていたが、1932年シンガポールの税関で私の荷物を調べたと告げたのは彼の方であった。それ以来、私たちはきわめて親しい友人となり、彼の家族全員が私のところへ診察を受けにくるようになった。

私はシンガポールで5日間、アルカフ氏の大きな家に泊めてもらった。彼はアラブ人の百万長者でその邸宅はロイド街にあった。ここで私は石原産業公司に行き、日本までの切符を買ったが、それはシンガポール・ドルで275ドルであった。もちろん2等である。

12月28日の朝10時、私はシンガポールでマレー半島西岸のバト・パハトから鉄鉱石を積んできた貨物船名古屋丸の船客となった。名古屋丸は石原産業の持ち船で、この会社はジョホールのスルタンから鉄鉱石の採掘権を得ていたのである。11時半頃、鉄鉱石のひと山を荷おろしした2000トンの名古屋丸は、ゆっくりとシンガポールの港を離れ、香港を目指して出発した。私の“ライオン・シティ”（獅子の町）との別れは静かなものであった。インタビューもなく、知人との別れの挨拶もなく、この英国の植民地には私を見送ってくれる人は一人もいなかった。

私が熱帯の地を離れたのは23歳のときだった。弟のムフタルがチェアルディンの息子やハジ・ジャヤのいとこのカジム・バクリと一緒に、エジプトのアル・アズハル大学へ宗教学を勉強しに出発したのは、彼が21歳のときであった。1920年頃のミナンカバウでは、裕福な家の子弟がエジプトへイスラーム学を勉強しに行くのが一種の流行のようであったのである。

南シナ海で1933年の正月を祝う

船客の中に経済学を勉強しに留学する同じミナンカバウ人のマジッド・ウスマン君がいて、私は彼と友達になった。海も静かで船旅は楽しかった。船の乗客係も親切な紳士で、いろいろと私たちの面倒をみてくれた。彼は私たちが昼や夜の食事に日本食が食べられないのを見て、特別なカレー料理を用意してくれた。それほどおいしくはなかったが、ともかく私たちはおかげでお腹をすかさないですんだ。

1933年の元旦、私たちは同じ船に乗り合せた日本人の夫婦に、「おめでとうございます」と日本語で挨拶した。日本語で新年の挨拶をかわすのは私たちにとって初めての経験だった。私の日本語はまだたどたどしかったが、勇気をだして日本語で挨拶したのである。お正月の餅や甘いものやみかんはおいしかった。酒も出されたが私たちは手をつけなかった。簡単な正月料理だったが、2時間ほど食卓についていた。しかし楽しい航海は長つづきしなかった。というのは、香港を出てから数日後、名古屋丸は大しけに遭遇したのである。稲妻をともなうひどい暴風雨で、船中の者が酔ってしまった。私は目まいと吐き気に悩まされ、何も食べられずただベッドに横になっているだけだった。「もし船が沈んだらどうしよう。僕もみんなと一緒に溺れ死んでしまうのか」と私は悲しかった。頭の上でエンジンのガラガラという音を聞き、巨大な波が何度も何度も船を持ち上げるのを感じるとき、私は身体中が

ふるえるようだった。私にとって船酔いは生れて初めての体験だった。私はひたすらアッラーの神に祈った。「どうか一刻も早く港に着くようお守りください。」苦難は2日2晩つづいた。だが神戸到着まではまだ3日もあるのだった。

神戸到着を前にして、私はいよいよ私の夢の国を目のあたりにする喜びでいっぱいだった。しかし一方で私は、さまざまな疑問にも襲われていた。冬はとても寒いそうだが、私の身体はそれに耐えられるだろうか。日本の風俗、習慣や食事に慣れることができるだろうか。何とか解決法を見つけなければ…。両親の祈りは私の耳にはっきりと残っていた。そして私は両親をはじめ、先生方、親類、友人たちや村の人びとから聞いた「外国へ行ったらこうしなさい」というさまざまな忠告を思いだそうと努力した。

もし外国に行って分からないことがあったら、先ず行動の指針を見つけることだ。

与えられた水を飲み、その地の人の木の枝を折ってはならない。

ちがった草にはちがった種類のバッタがいる。ちがった海には別の種類の魚がいる。

河の川上で水浴びをしてはいけない。河口でしなさい。

年長者には敬意を払うこと。若い人びとには愛情をもって接すること。

しゃべるときにはよく気をつけて。まちがったことばを使うのは、頭をガツンとやられるもと。

祈りを忘れてはならない。

帰ることなど考えるな。

どこの土地へ行っても、そこの土地の空に敬意を払いなさい。

海洋は神聖であり、大地は慈悲深い。

「ビスミラー」（アッラーの名において）という言葉を上陸第一歩に唱えること。

こういうことを思い出しているうちに私は心が慰められ勇気が湧いてくるのをおぼえた。「軽ければ浮くし、重ければ沈むものさ」と私の父はよくいったものだった。